

フィンドレー大学奨学生レポート（機械工学系） 12月 「本場のクリスマス」

クリスマスを通して

12月25日は、知る人ぞ知る、クリスマスという日です。クリスマスという日は、約2000年前にイエス・キリストが誕生した日だそうです。日本では、キリスト教信者であるか、どうかにかかわらず、とにかく、この日を祝います。これは、万物の神を受け入れる日本の伝統ならではかもしれません。中には、クリスマスツリーや、光り輝く電飾により、各々のご自宅を装飾する方々もいます。また、日本でのクリスマスは、一部の人にとって、恋人と一緒に過ごす時間、と認識されています。

しかし、日本と違い、アメリカは、キリスト教の国です。その違いが顕著に現れている例は、大統領就任式です。就任式において、大統領は聖書に手を置き、宣誓します。このようなキリスト教国のアメリカで、どのようなクリスマスの伝統、習慣があるのか、非常に興味がありました。

総じて、アメリカでのクリスマスはとても静かなものでした。アメリカの方々には、クリスマスという日を家族で過ごす日、と認識しており、両親・家族が住んでいる出身地に帰省します。そのため、なんというか、24、25日は、街全体が閑散としていました。道路を通過していく車たち、周辺の家々にも寂しさが宿っていました。町に残っているのは、約一月半前から用意された電飾のみでした。

クリスマスイブの日は、フィンドレーに残された寂しい留学生とともに、近所の教会に足を運びました。まず、教会に到着するやいなや、驚いたのは、教会の非排他性です。キリスト教についての知識が全くと言っていいほど、かけていた私たちをすんなり、受け入れ、中に通してくださいました。その教会で、何を言っているのかほとんどよくわからない牧師による説教を聞きながら、自分の将来について漠然と思いを巡らせていました。そして、その長い説教が終わると、皆が立ち上がり始めました。その周りの動向から、どうやら、賛美歌を歌うようだ、ということを感じ、私もようやく立ち上がりました。しかしながら、皆が歌い始めると同時に、あることに気づきました。それは、音程が高いことです。後ろに座る初老の男性は、曲のキーの高さに全く動じず、高々と歌い上げていました。私も負けじと、歌おうとしますが、私の埃かぶった地声ではどうにもなりません。そのため、最終的に、裏声を動員して応戦するはめになりました。斜め前方の若い女性とその母方と推測される方が、チラチラ私の方を見ていた気がしますが、それは、おそらく、私が自意識過剰だからだったのでしょう。しかしながら、異文化経験という観点で、クリスマスに教会で賛美歌を歌うという経験は素晴らしいものでした。右も左もわからない

環境に、自ら飛び込み、周囲に溶け込もうとする経験は、辛いときもありますが、楽しいものでもあります。郷に入っては郷に従いたいものです。



非排他的な教会

また、クリスマス当日には、フィンドレーに住まれている、ある夫婦の方に、クリスマスランチに招待していただきました。しかしながら、そのランチはポトラック方式で、各々の参加者は、料理一品を持参しなければいけなかったのです。レシピのレパートリーが目玉焼きしかない僕は、若干狼狽しましたが、最終的に同奨学生である荒瀬くんにすべてを委託する形になりました。このように、不正にランチに参加する権利を得た私ですが、ランチを通して、あることを痛感させられました。それは、自分の教養と英語力のなさです。

例えば、ラジオから流れるクリスマスソングを耳にした彼らは、これがイギリスで演奏されているということを口にしました。そして、どういう訳か、イギリス皇室の歴史のような事柄を話し始めました。歴史をろくに勉強していなかった私は、話している内容が全く分かりませんでした。また、それに加えて、私の英語力の不甲斐なさも相まって、懇談の輪から、見えない壁で締め出されることになりました。その後突然、日本の皇室では、女性も天皇になれるのか、という質問を振られた時も、知識のなさや、英語力不足で、答えることができませんでした。

このようなことがあってから、自分の国について、話す内容について英語で事前に準備しておくべきであると考えようになりました。例えば、アメリカのお菓子の話題になったとき、留学生の身である私は、あたかも日本代表のように扱われ、日本のお菓子について聞かれることがあると思います。そのよう

なときに備え、まず、物事の枠組みを大まかに捉えること（日本のお菓子は、基本的にあずきがベースとなっていること）と、それを説明するための語彙を調べておくこと（あずきは、英語でなんというか）が必要であると思いました。

ネイティブスピーカーでない私たち留学生が、ネイティブのアメリカの方々とは会話をするためには、その差を少しでも埋めるための準備が不可欠です。これからの残りの留学生活で、自分の国・文化について、より多くの事柄をアメリカの方々に伝えられるような努力をしていきたいです。



クリスマスに卓を囲む様子